

新刊紹介

阿部珠理 編

『アメリカ先住民を知るための六二章』

(明石書店、二〇一六年)

大泉 惟

人は神によって平等に創造され、その生命、自由、幸福の追求権は生まれながらに譲渡不能であると高らかに謳った独立宣言書には、次のような文言が添えられている。

彼「イギリス国王」は、我らアメリカ人の中で内部から反乱が起るよう扇動し、辺境地域の住民や情け容赦のないインディアン^①の野蛮人を味方に引き入れようとした。彼らの戦いの掟は年齢や性別、身分の違いと関わりのない無差別の殺戮で有名である。

まさしく、アメリカ先住民は建国期当初から「彼ら」であり、「我ら」ではなかった。黒人史しかり、移民史しかり、

アメリカの社会史はアメリカ型民主主義、すなわち、内部の平等が叫ばれる一方で、常に他者が創造乃至は周縁外に排出され、或いは同化吸収される排除と包摂の論理がまわりつく。それは常に「民」とは誰かが問われる歴史であり、人種・出身・言語・性をもって自他を区分し続ける歴史でもある。

本書、『アメリカ先住民を知るための六二章』は他者として生きることを宿命づけられたアメリカ先住民の歴史・社会・文化を活写したものである。編者は「先住民研究は地味」と謙遜するが、同研究は単なる歴史学あるいは社会学・文学研究の一分野として位置づけられるものではない。

歴史的に先住民は、「インディアン部族」という「主権を有する独立した国家」の一員として認知され、その土地の奪取は主に、国家間の合意文書である「条約」に基づいて行われた（第一章、七章）。合衆国憲法第一条八節三項に外国（foreign nations）、州（several States）、インディアン部族（Indian tribes）との通商を規律する権限を連邦議会が所有すると規定されているのは、そのためである。一九世紀末までに先住民の土地奪取が概ね完了すると、連邦政府は先住民を同化するべく、自身の宗教（キリスト教）、言語（英語）、生活手段（自営農業）を強制的に学ばせる文明化政策に着手し始める。一連の政策にはハーバー

ト・ウエルシュやアルバート・スマイリーをはじめとした同時代の人権運動家達の精力的な活動が背景にあることを見逃してはならない（第五章）。これら文明化政策と合わせて、政府は保留地を個人単位に分割し、先住民の自営農民化を狙うドーズ法を制定したが、その結果、一八八一年に一億三八〇〇万エーカーあった先住民の所有地は一九三四年の時点で五〇〇〇万まで減少した（第六章）。こうして先住民が持つ資産は法的・文化的に収奪されていったのである。

以上、本書第一部と絡めながらアメリカ先住民の軌跡を概観したが、斯様な単純な作業を通すだけでも、アメリカ合衆国が大陸に群立する「野蛮なる国」を併合し、「文明化」させることで国威を發揚していったことが容易に理解されるだろう。端的に言えば、植民地時代より、アメリカは先住民の土地収奪と文化的抹殺を土台とし、国力を増強していったのである（その国力は一八九八年米西戦争において存分に發揮される）。この点で、アメリカ先住民の歴史は社会史でもあるが、同時に外交史でもあり、軍事史でもある。それは中東の「独裁国家」を「民主化」するため、に軍を派遣し、或いは現地の「穏健派」勢力を支援し内部崩壊を期待するオバマ政権（あるいは現在のトランプ政権か）の対外政策を評価する際の道標となる。一九七〇年代には既に、ジャーナリストの本多勝一がベトナム戦争は合

衆国のインディアン戦争の延長線上にあると唱えたが『殺される側の論理』、まさにアメリカ先住民に関する情報は一部の好事家が収集するものではなく、現代の国際情勢を具に検討するべく、現代人が身に着ける必要に迫られた一般教養なのである。

本書は、明石書店が刊行するエリア・スタディーズ・シリーズの第一四九巻にあたるものであり、第一巻『現代アメリカ社会を知るための六〇章』、第一〇巻『アメリカの歴史を知るための六三章』の姉妹作品とも言えるものである。同シリーズの特徴として一章に一つのテーマが割り当てられ、内容が完結していることが挙げられるが、本書もまた、基本的には、どの章から読み始めても差し支えない。とはいえ、構成としては過去（第一部 連邦—インディアン関係）、現代（第二部 現代社会問題）、文化（第三部 文化と宗教）、人物（第四部 人物）と編年体で記述されており、一章から読み進めることで過去から現在、そして未来へと続くアメリカ先住民の旅の軌跡を垣間見ることが出来るだろう。

類書と決定的に異なるのは、先住民の現在（いま）を活写するべく奮闘している点であろう。すでにウィリアム・ヘーガン『アメリカ・インディアン史』、富田虎男『アメリカ・インディアン』の歴史、藤永茂『アメリカ・インディアン

阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための六二章』（大泉）

悲史』のように北米先住民の過去を鳥瞰する古典は多々存在するが、これらは概して、二〇世紀後半の先住民に関する説明が不足しがちである。その点、本書は歴史家のみならず、文学者、社会学者を揃え、学問の領域を超え、多角的に先住民の現在を照射しようと試みている。本書の約三分の二は現代のアメリカ先住民が抱える問題に頁が割かれており、この点、従来の通史とは一線を画すものとして評価できるだろう。スタンスとしては編者、阿部珠理の『アメリカ先住民から学ぶその歴史と思想』、共著者である鎌田遵の『ネイティブ・アメリカン―先住民社会の現在』を発展させたものだと思う。

先住民の歴史に明るい一般読者でも、都市インディアンを抱える貧困（第二章）や歴史教育を巡る闘争（第三三、三六章）、文化行事の商業化への懸念（第四章）等については深く知らないところであろう。「歴史とは現在と過去との対話である」とはE・H・カーの名著『歴史とはなにか』で語られた言葉であるが、過去を知らずして現在を語ることがかなわないのと同時に、現在を知らずして過去だけを語ることもし出来ない。本書は、こうした要求に確かに応えてくれるものである。アメリカ先住民に関心のある全ての読者諸氏に薦めたい。

（本学大学院文学研究科史学専攻博士課程後期課程）